

II 研究仮説

探求的な問題解決のプロセスを繰り返す過程で、持続可能な開発に関する価値観が広がり、持続可能な社会に向けて、自ら気付き・考え・行動することができるようになるだろう。

持続可能な社会の創り手となるためには、平和、環境、福祉などについての価値観を広げていくことが大切である。本研究では、各テーマを追求する際に、**質の高い探求的な問題解決のプロセスを繰り返す**ことが、結果的に**価値観の広がり**に結びつくと考えた。

III 研究の視点

①ESD カレンダーの作成を通したカリキュラム・マネジメント

教科等横断的な学習過程を組むことの意義は、いくつかある。

1つめは、問題解決の質を高めることである。総合的な学習の時間や生活科で扱っている題材を用いて、各教科等のねらいに合わせた学習をすることで、よりよく情報を整理・分析できたり、表現したりすることができると考えた。

2つめは、よりよく価値観を広げることである。各教科等で学ぶ内容と、総合的な学習の時間や生活科で扱っている題材を関連付けて学ぶことで、教科等のねらいをよりよく達成できるとともに、価値観の広がりにつながる。

3つめは、各教科等の学びの質を高めることである。総合的な学習の時間や生活科における問題解決のそれぞれの過程の目的があること、また、広がった価値観があることで、各教科等の学習の内容をよりよく学ぶことができる。

②SDGs の視点を生かした単元開発

単元開発では、SDGs の視点を、価値観を育む際の指標としていく。また、外部人材や地域資源等の活用を積極的にしていく。活用することのよさは、2つある。

1つは、外部の方と共に単元開発を行っていく。専門的な見地からアドバイスを受けながら、授業作りをすることで、問題解決の質を高めることができるという点である。2つは、外部講師の方の講話や地域資源等の活用を通して、よりよく価値観を広げることができるという点である。実際に活動をしている方の価値観や実際の事物に触れることで、児童が、身の回りの事象に興味関心をもち、自分事として関わることができると考えた。

③身に付けさせたい力と価値観の深まりの検証

持続可能な社会の担い手となるために、1つは、問題解決に必要な力の育成が大切である。個々の授業レベルで、評価規準を設定することで、目指す児童像が明確になり、身に付けさせたい力が確実についているかどうか判断ができる。また、児童自身が問題解決の仕方を知り、自分が全体のプロセスの中のどの段階にいるのかを自己評価しながら、問題解決に取り組むことからも身に付けさせたい力にアプローチしていく。

2つは、持続可能な開発に関する価値観を身に付けることである。問題解決のプロセスの中で、初め、途中、終わりで、児童がテーマとしている価値観をどのように捉えているかを検証していくこと、また、児童自身も振り返り、価値観の広がりを実感することで、よりよく身に付けられるようにしていきたい。

イメージ図

